

暗黙のシャイネス観の日米比較¹

稲垣 勉^{1,2} 澤海 崇文^{1,3} 相川 充^{1,4}

¹ 教育テスト研究センター ² 鹿児島大学 ³ 流通経済大学 ⁴ 筑波大学

本研究は、シャイネスという心的特性は変わりうるものであるか否かという「暗黙のシャイネス観」について、日本人とアメリカ人の差を検討するため、日米ともに1400名以上のサンプル調査を行った。その結果、「シャイネスは固定的なものであり、容易に変容させることはできない」とする実体的シャイネス観得点と、「シャイネスは自身の努力により変容させることが可能である」とする可変的シャイネス観得点は、どちらも日本人よりアメリカ人の方が高く、また男性より女性の方が高かった。日米におけるシャイネスの相違を検討する際や、シャイネスを低減させる介入を試みる際、こうした信念も併せて測定することも一考に値する。

キーワード：シャイネス、暗黙のシャイネス観、日米比較

1. 問題と目的

シャイネス (shyness) とは、対人場面において生じ、社会的不安と对人的抑制という特徴を持つ、情動的かつ行動的な症候群である (相川, 1991)。内気さや恥ずかしがり屋の程度であるシャイネスについて、欧米では、自身のシャイネスが高いことは社会的にネガティブな評価につながる可能性がある (Zimbardo, 1977)。そうした理由から、シャイネスを低減する試みも行われてきた (e.g., 相川, 1998)。

シャイネスの低減に関連して、シャイネスの変容可能性に関する信念についても検討が行われている。「シャイネスという心的特性は変わりうるものであるか否か」に関する信念は、Implicit self-theories of shyness (Beer, 2002: 以下 ISTS) と呼ばれる。これは Dweck & Leggett (1988) の暗黙の知能観 (Implicit self-theories of intelligence) の考え方をシャイネスに適用したものであり、本稿では「暗黙のシャイネス観」という呼称を用いる。暗黙の知能観の考え方と同様に、暗黙のシャイネス観は「シャイネスは生まれつきのものであり、容易には変えられない」という立場と「シャイネスは努力によって変えられる」という立場に分けられる。本稿では前者を実体的シャイネス観、後者を可変的シャイネス観と記述する²。シャイネスが高い者でも、可変的シャイネス観を有する場合、実体的シャイネス観を有する場合よりも社会的状況を「学習の機会」と捉え、積極的に相互作用を行う (Beer, 2002)。Beer (2002) が作成した ISTS 尺度を翻訳した田島他 (2015) は、実体的シャイネス観を有する場合、SNS やブログなどのインターネット上での情報発信を行うほど、緊張、過敏さ、自信のなさといったシャイネスの側面が高まるなどの結果を報告している。

本稿では、この暗黙のシャイネス観の日米比較を行う。先行研究 (Beer, 2002; 田島他, 2015) では性差には言及されていないため、本研究では試みに性差についても検討する。

¹ 本研究のデータセットは稲垣・澤海・相川 (2017) と同一であるが、稲垣他 (2017) ではシャイネス尺度の得点について日米間の比較を行っており、暗黙のシャイネス観に焦点を当てた本研究とは目的が異なる。

² Beer (2002) は Dweck の entity と incremental という表現を踏襲している。本邦における知能観研究では、前者は「実体的」、後者は「増大的」と訳されることが多いが、これをシャイネス観に適用した場合、「増大的」という用語はシャイネスが増大するというニュアンスになり、混乱が生じると思われたため、「可変的」と表現することとした。

2. 方法

2.1 調査対象者 インターネット調査会社のモニタ（日本人 1448 名：男女各 724 名，16—69 歳，アメリカ人 1400 名：男女各 700 名，16—68 歳）から回答を得た。アメリカ人モニタの多くは白人（74%），アフリカ系アメリカ人もしくは黒人（9.7%）であった。

2.2 材料 「私のシャイなところは，自分ではほとんど変えられない私に関するものである」「私は，変えようと思えばシャイな面を変えることができる」など 6 項目，5 件法の ISTS 尺度（Beer, 2002; 田島他, 2015）を使用した。この尺度は実体的・可変的シャイネス観を支持する項目がそれぞれ 3 項目ずつ含まれている。

2.3. 手続き 調査は 2016 年 3 月（日本）と 2017 年 2 月（アメリカ）に，それぞれ実施した。調査参加者は調査会社から案内された URL にアクセスし，複数の尺度への回答を行った。このうち，本稿では ISTS 尺度の得点に絞って報告する。

3. 結果

3.1 尺度の得点化 ISTS 尺度は実体的シャイネス観を支持する 3 項目を逆転処理し，合算平均得点を求めたところ，日米ともに信頼性係数が低かった（順に $\alpha = .61, .44$ ）。そこで因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行ったところ，日米に共通して実体的シャイネス観に関する 3 項目と，可変的シャイネス観に関する 3 項目からなる 2 因子構造が得られた。それぞれ合算平均得点を求め，実体的シャイネス観得点（日本，アメリカの順に $\alpha = .65, .73$ ），可変的シャイネス観得点（日本，アメリカの順に $\alpha = .78, .68$ ）とした。なお，実体的・可変的シャイネス観得点の相関係数は，日本で $r = -.06$ ($p < .05$)，アメリカで $r = .17$ ($p < .001$) であり，男性で $r = .12$ ($p < .01$)，女性で $r = .02$ (ns) であった。

3.2 分散分析 実体的シャイネス観得点および可変的シャイネス観得点を従属変数，国（日本・アメリカ）×性（男性・女性）を独立変数とした 2 要因分散分析を実施した。まず，実体的シャイネス観得点に関して，国の主効果 ($F(1, 2844) = 6.15, p = .01, \eta_p^2 = .002$) が認められ，日本 ($M = 3.11, SD = 0.69$) よりアメリカ ($M = 3.18, SD = 0.91$) の方が得点が高かった。また，性の主効果 ($F(1, 2844) = 15.51, p < .001, \eta_p^2 = .005$) も認められ，男性 ($M = 3.09, SD = 0.82$) より女性 ($M = 3.21, SD = 0.79$) の方が得点が高かった。

続いて可変的シャイネス観得点に関しても，国の主効果 ($F(1, 2844) = 45.99, p < .001, \eta_p^2 = .016$) が認められ，日本 ($M = 3.27, SD = 0.80$) よりアメリカ ($M = 3.47, SD = 0.81$) の方が得点が高かった。また，性の主効果 ($F(1, 2844) = 17.97, p < .001, \eta_p^2 = .006$) が認められ，男性 ($M = 3.30, SD = 0.82$) より女性 ($M = 3.43, SD = 0.79$) の方が得点が高かった。結果のグラフを Figure1 に示す。

4. 考察

本研究では，シャイネスに対する自己理論の日米比較を行った。その結果，日本人よりもアメリカの方が，また男性よりも女性の方が，実体的シャイネス観，可変的シャイネス観ともに高く有していることが示された。アメリカ人と中国人の暗黙のシャイネス観を比較した Zhang & Xu (2019) では，アメリカの方が中国人よりも実体的シャイネス観得点が高いという結果を示しており，本研究はこれと一致する³。

Beer (2002) の知見を踏まえると，日本人よりもアメリカの方が，あるいは男性よりも女性の方が，社会的状況において積極的な相互作用を行えば，その結果として自身のシャイネスを低減できると信じていると推察できる。日米におけるシャイネスの相違を検討

³ Zhang & Xu (2019) は Beer (2002) と同様，ISTS を 1 因子で得点化（得点が高いほど実体的シャイネス観が高い）しており，可変的シャイネス観については本研究と比較できない。

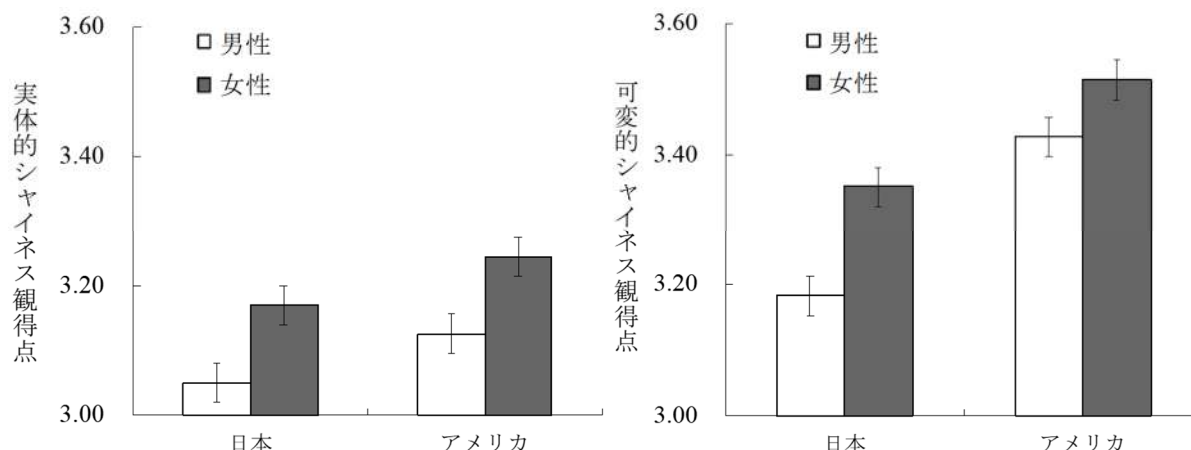


Figure1 日米および男女における暗黙のシャイネス観得点の相違

する際、こうした信念も背景要因として一考に値する。また、シャイネスの低減をめざした介入研究を行う際、参加者自身が「シャイネスを変えたい」という動機づけを有しているか否かは、介入が奏功するか否かを左右する要因になり得る(稲垣・澤海・澄川, 2020)。したがって、シャイネスを扱う今後の研究において、暗黙のシャイネス観を併せて測定することは有意義と言えるだろう。

ただし、本研究で得られた効果量は小さく、解釈は慎重に行う必要がある。また、実体的・可変的シャイネス観の両者がアメリカ人の方が高いという点については、日本人は質問紙への回答において中点を選びやすいという反応バイアスの可能性も捨てきれない。加えて、ISTSを1因子として使用している先行研究(Beer, 2002; 田島他, 2015)では、いずれも信頼性係数の推定値は $\alpha = .75$ という値が報告されている。それらと比して、本研究では全体の信頼性係数は低かった。こうした点も踏まえ、さらなる検討が必要である。

5. 参考文献

- 相川 充 (1991) 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究, 心理学研究, 62:149-155
- 相川 充 (1998) シャイネス低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討, 東京学芸大学紀要第一部門 (教育科学), 49:39-49
- Beer, J. S. (2002) Implicit self-theories of shyness, *Journal of Personality and Social Psychology*, 83: 1009-1024
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988) A social-cognitive approach to motivation and personality, *Psychological Review*, 95: 256-273
- 稲垣(藤井) 勉・澤海崇文・相川 充 (2017) 特性シャイネスの日米間比較—今なお「日本人はシャイ」か—, 教育テスト研究センター年報, 2:53-54
- 稲垣 勉・澤海崇文・澄川采加 (2020) 潜在的シャイネスの低減可能性の検討—対概念の活性化と自己との連合強化を通して—, 鹿児島大学教育学部研究紀要 (人文・社会科学編), 71:57-66
- 田島 祥・松尾由美・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・坂元 章 (2015) メディア利用がシャイネスに及ぼす影響—暗黙の自己観による調整効果の検討—, 日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 44
- Zhang, Z & Xu, Y. (2019) Implicit theories of shyness in American and Chinese children, *European Journal of Social Psychology*, 49:200-210
- Zimbardo (1977) *Shyness: What it is, what to do about it*, Massachusetts: Addison-Wesley.

